第百十四回碌山忌記念対談

井上涼トークセッション「表現とアイデンティティ☆」

日時：令和六年四月二十一日（日）十三時半～十五時半

会場：碌山公園研成ホール

ナビゲーター：濱田卓二（碌山美術館学芸員）

井上涼（アーティスト）

一九八三年兵庫県生まれ。二〇一三年より世界の美術を歌とアニメで紹介するＮＨＫ　Ｅテレの美術番組「びじゅチューン！」で作詞、作曲、歌、アニメを担当。毎日小学生新聞でまんが「井上涼の美術でござる」を連載中。全国各地の美術館で展覧会を行なっている。ほかの作品に「赤ずきんと健康」「確信」などがある。

濱田：皆さんこんにちはお時間になりましたので、井上涼トークセッション「表現とアイデンティティ☆」を始めたいと思います。まず主催者碌山美術館、館長幅谷よりご挨拶を申し上げます。

幅谷：皆様こんにちは、長野県下からまた全国の遠いところからこのトークセッションにご参加いただき、誠にありがとうございます。本日の井上涼さんのトークセッションは、明日第百十四回碌山忌の関連イベントとして開催いたしております。

碌山こと、荻原守衛についてご説明させていただきたいと思います。

荻原守衛はここ安曇野出身で、明治十二年に生まれた彫刻家です。留学中パリでロダンの《考える人》を見て画家から、彫刻家に転身をいたしました。三十歳五ヶ月で亡くなってしまいましたので、彫刻は十五点しか残っておりません。

《北條虎吉像》と絶作の《女》は、石膏原型が国の重要文化財に指定されております。

そして当館は、六十六年前に三十万の人たちの労働奉仕と寄付金によって碌山館が建設され、碌山の作品をはじめとして、その他に友人の高村光太郎などの、碌山に影響を受けた芸術家たちの作品も展示しております。

このトークセッションの終了後もご覧いただけますので、是非ご覧になってください。

それでは井上さんのご紹介をいたします。

皆さんは井上涼さん大ファンですので、既にご存じかと思いますが、簡単にご紹介いたします。

井上涼さんは、兵庫県のお生まれでして、現在は東京都にご在住です。金沢美術工芸大学デザイン学科視覚デザイン専攻を卒業。卒業制作の「赤ずきんと健康」が、国際展での賞を受賞されております。本当に初めから才能のある作家さんだなと思いました。

それからはＮＨＫのＥテレで二〇一三年より十一年間続いております「びじゅチューン！」を自作の歌とアニメで制作されております。私も大変興味深く見ております。忙しい中、今も年に六作品も制作し続けているという作家さんでいらっしゃいます。

この後いろいろ楽しいお話をお聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

濱田：ありがとうございました。それでは皆様もお待ちかねかと思いま

すので、井上涼さんにご登壇いただきたいと思います。では井上さんご登場ください。

井上：よろしくお願いします。濱田さん、自己紹介済んでますか？

濱田：私は、本日、井上涼さんにご質問したり、お話しをさせていただきます碌山美術館学芸員の濱田と申します。よろしくお願いします。

井上：よろしくお願いします。まず座らせていただいて、はい。まあこんな感じで進めていくと思うんですけれども、はい。こんなに来てくださってありがとうございます。皆さん音は聞こえてますか？ 後ろまで大丈夫ですか。

濱田：今日は二時間のお話ということで、十五時半終了を予定してます。少し長引くことも予想されます。

井上：こういうお話の時って長引きがちですから。はい。

濱田：十六時のあずさに乗りたいって方もいらっしゃると思います。予定通り十五時半終了を目指して頑張ります。もし長引いた場合は大変申し訳ございません。中座していただいて、構いませんので。

井上：ちなみに十六時のあずさに乗ろうと思ってるよって方は、どれぐらいいらっしゃいますか？ いらっしゃいます？ そんなにいらっしゃらない？ 大丈夫ですか？ 電車の時間を気にしながら聞いてると、落ち着かないですから、私たちもね、時計を見ながら話すんですので。もし、やばいってなったらあの出られてください。

濱田：まず昨日、松本に来られて、その後安曇野に入ってきました。この辺りのご感想はいかがですか？

井上：そうですね広いなっていう感じがしました。ここに来るまでに、わさび農園にも連れて行っていただきました。ちなみに皆さん今日は長野県内の方がやっぱ多いんですか？ 県外のめっちゃ遠いとこから来たよっていう自信のある方は？ どちらから？

参加者：京都です。

井上：京都から、ありがとうございます。他にいらっしゃいますか？ 別に言いたくなくってもいいんですけど。

参加者：大阪です。

井上：大阪から、ありがとうございます。「びじゅチューン！」十周年のTシャツも着ていただいてありがとうございます。

　そんな感じか、じゃあ長野県内の方がやっぱり多いんですね。長野県もでかいんですよね。長野県の端っこから時間かけて来たって方は？

　ごめんなさいいろいろ聞いて。県内でも遠い人は朝何時に出たらここに着くんだろう？

濱田：長野県もそこまで広いわけじゃないですよ。

井上：そうですよね。私、長野県は人生史上二回目なんです。前回は大学生の時だったのでほぼ記憶がないんです。だから今回ほぼ初の長野県です。「びじゅチューン！」のイベントでも長野県は無かったんです。あの、今日は「びじゅチューン！」の関連イベントではないですけれど、長野県にやって来れて本当に嬉しいなとしみじみ思ってます。

　あとお蕎麦が美味しかったですね。長野県って言えばお蕎麦って聞くからどんなもんなのかと思ってたら、昨日あの松本市内の蕎麦屋さんに最初に連れて行っていただいて、本当に美味しいわって思いました。そんなところです。

濱田：はい。じゃあ始めていきましょうか。

井上：はい。ちょっとお茶ついどこ。

濱田：えっと今回は井上涼さんの表現とアイデンティティということで、イベントというよりも、井上涼さんがこれまでにどのようなことを経験されてきたか、とか……。

井上：あっ、お茶ついどく？　ああもう飲んでた。ごめんなさいね。
　ごめんなさい、流れで言いますけど、私、濱田さんとは大学の同級生なんですよ。だからあの今回、呼んでいただいたのも、それがきっかけだったんです。
　でもあの別にそんなに仲良くしてたってわけでもないんです。
　ちっちゃい学校だからもう誰でも顔馴染みの感じだったんで「はまちゃん」って呼んでいたんですね。
濱田：僕はあの「涼ちん」って呼んでいたんですけど、今日は「井上さん」で。
井上：そうなんです。だからちょっと馴れ馴れしい感じで話しかけてますけど、そうかそういうことだと思ってください。はいどうぞ。
濱田：えっとまあそういった形で、井上涼さんの考え方であったり、LGBTQのことであったり。ちょっと過去に遡りながら表現者井上涼の様々なことを、お話しいただきたいと思います。
井上：じゃあよろしくお願いします。
濱田：よろしくお願いします。まず、井上涼の歩みということで、現在大活躍されておられます井上さんですけども、時代を遡って美大への進学を決めた高校生の頃のお話をお聞きしたいと思います。今日も高校生の方がお見えになってるかなと思います。
井上：あっ、いらっしゃいます？　ありがとうございます。ちらほらといらっしゃいますね。
濱田：お写真を見ながら、高校生の頃についてお聞きしたいと思います。
　ここに写っているトランペットを吹かれているのが井上さん。これは何年生の頃の写真ですか？
井上：高校二年生ですね。吹奏学部だったので、多分三年生の卒業公演なのかな。
濱田：もう一枚ありまして、こちら（画像①）。
井上：これは翌年の自分の卒業公演ですね。めっちゃ下手だったんですけど卒業公演ということで、ソロを吹いた時の必死な表情。スポットライトまで当ててもらって、本当に上手くなかったんですけど、高校生活で一番頑張ったのは部活だったかなと思いますね。
濱田：音楽は小さい頃からやってたんですか？
井上：そうですね私の母はピアノの先生をしていて、ちなみに父は高校の美術の先生でした。まあ芸術には親しみやすい環境で育ったなと思いますね。それが今に繋がっていると言えば結果論ではあるんですけど、今に活かされていると思います。自分も絵を描くのが好きだったし、だから美大に行きたいと思うのも自然な流れでした。なんか親の姿や仕事を見ていて、大学は美大に行ってもいいのかなと。
　美大に来ている方の中には、親御さんを説得する必要のあった方もいました。ただ私の場合は、一浪はしましたけど親からの理解に関しては苦労せず進学できました。こんな会話の感じで大丈夫？　多分二時間こんな感じで続くけど、みなさん寝ないでね。
濱田：これはもう学生時代ですね。いつ頃の写真ですか？

画像①　高校時代３年生時

画像②　大学時代１年生時

井上：これは多分一年生ですね。名物課題がいくつかあって。色のチップを一〇〇色作ってそれをなんかこうサークル上に並べて色のグラデーションを綺麗に作るっていう課題があって。それでせっせと少しずつ色味を変えたチップを作ってるところですね。なんか、茶髪の感じも恥ずかしいです。

濱田：次はこの写真です。

井上：髪型とかも美大生っぽすぎて恥ずかしい。多分大学二年生の頃ですね。

濱田：こんな感じで次の写真に行きますね（画像④）。

井上：ああこれも恥ずかしいですね。この髪型とか恥ずかしいですね。

濱田：これはどういった状況だったのですか？

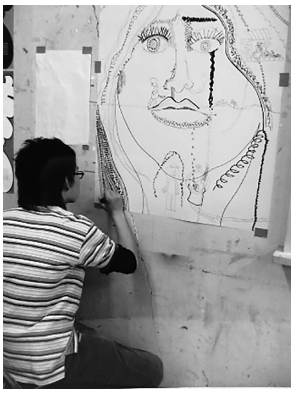
井上：なんか笑ってるから、先生が横やりを入れてきて、応じているところだと思います。

濱田：後ろの絵も井上さんの作品？

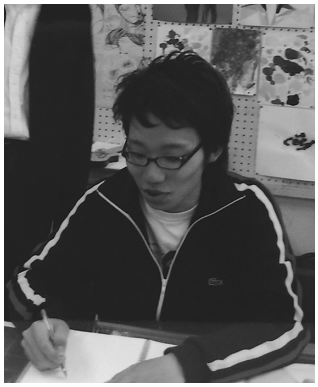
井上：そうですね。私はやたらと作品を作っていて、これ自分が所属していたクラスの教室なんですけど、誰にも頼まれないのに描いた絵を勝手に張りまくってました。なんかすごいやる気に満ちた学生ですよね。

濱田：では次へ（画像⑤）。

井上：ああこれ、奥に私がいます。ああもう恥ずかしいですね。この裸足でいる感じとか。すごい恥ずかしい。



画像③　大学時代２年生時



画像④　大学時代２年生頃

濱田：美術大学のデザイン課って、綺麗で整ってるイメージがあるかと思うんですけども、写真のように井上さんの教室は雑然とした感じでしたね。

井上：汚いんですよ。母校は去年二〇二三年に新校舎に移転したんですけど、私たちは古く汚い校舎を使ってました。

濱田：ちなみにこれは何をやられてるとこですか？

井上：これは多分、商店街の壁に貼るパネル画を頼まれて、その絵を描いてるところじゃないかなと思います。

濱田：疲れきってますね。

井上：大抵のスケジューリングがうまく行ってなくて、徹夜とかしがちな学生でしたね。

濱田：じゃあ次の画像へ。これも教室ですね。学園祭の準備かなんかですか？

井上：右の方に春巻とか唐揚げとか書いてあるから多分学祭のお店の準備ですね。

濱田：学生時代、井上さんはデザイン科の視覚デザインを専攻されていて、当時からアニメーションを作成されていた記憶があります。

画像⑤　大学時代１年生頃

画像⑥　大学時代１年生頃

なかでも卒業制作で作成した「赤ずきんと健康」は卒業後も評価され続け、井上涼の初期の代表作と言えるのかなと思っておりますが、ご本人としてはいかかですか。

井上：そうですね。ちなみに、この「赤ずきんと健康」をご存知の方は今日どれぐらいいらっしゃいますか？ありがとうございます。半分ぐらいかな。

そうですね、これは卒業制作で作ったんですけど、何かテーマを決めて制作したいと思って作りました。その当時、健康ブームが世間に来ていて、それでテーマを健康に絞りました。でも普通に健康促進ムービーを作るわけにもいかないから、ということで、体の中に入っていく物語をベースにしようと考えました。赤ずきんってそう言えば狼に食べられるから、狼の体の中に入れるな。というふうに連想して、それで体の中で健康について訴えかけるストーリーが作れると思って、赤ずきんを題材に選んだと記憶しております。

デザイン科だったので、目的があって、その目的を叶えるための手段を考えていくプロセスを絶対取るんですけど、健康に気をつけるという目的を、人に面白がってもらいながら叶える方法として「赤ずきんと健康」というアニメを作ることにしました。

濱田：この「赤ずきんと健康」は、金沢21世紀美術館で開催された卒業制作展で発表されて、その後、全国の学生限定の映像コンペでも賞を受賞されましたよね。

井上：佳作なんですけどね。学部の三年生の頃にも映像作品は作っていたので、「赤ずきんと健康」は自分一人で作ったアニメ第二作目だったと思いますね。

画像⑦　赤ずきんと健康

当時は半年ぐらいかけて卒業制作を作るんですけど、そうだな、私はこの頃から歌とアニメを一人でやるようになっていたので、えっとこの作品は何枚ぐらいかな五〇〇枚ぐらいで済んだのかな。今とそんなに制作スタイルは変わっていないんですけど、自分で五〇〇枚ぐらい絵を描いて色塗ったりして作ってました。

濱田：本日は皆さんにも「赤ずきんと健康」ご覧いただきたいと思います。ただ少し映像が長いので、最初の二分程ご覧いただきたいと思います。井上さんの公式ＹｏｕＴｕｂｅチャンネルにも上がっておりますので、続きが気になる方はご自身でご覧いただけたらと思います。

QR コード①
赤ずきんと健康

（作品を見て）

濱田：なんと言いますか、緩くありつつも、しっかり伝えるという。こう今の井上さんの姿がすでにあったんだなと感じます。ご本人としてはどう思われますか。

井上：セリフは今にくらべて棒読みだなって思いましたね。今はもうちょっとハキハキ喋れるんですけど、この頃はまだ心を閉ざしていたので。

濱田：「赤ずきんと健康」は二〇〇七年の作品でして、その後二〇一一年にカナダで開かれたトロントジャパニーズショートフィルムフェスティバルで映画祭賞も受賞しますね。

大学の卒業制作が、四年後に国際的に評価されるって珍しいケースなのかなと思ったりもしますがいかがですか。

井上：そうですね。このフェスティバルは日本人の方がトロントで企画したフェスティバルだったので、国際的とまで言えるのかは分かりませ

んが。

　この作品は、さっきお話しいただいた学生限定のアニメコンテストで賞を取ると、どこの局かは忘れたのですが、深夜にテレビ放映してくれる副賞がついてまして、それで深夜に流れた「赤ずきんと健康」を誰かがニコニコ動画に転載して、また別の人もって具合に。そもそも無断転載ですけどね。そこから二年間ほど再生回数がじわじわ微増する時期が続いて、そしてある時急にブレイクして。大学の同級生からは電話が掛かってきて「涼ちんニコニコ動画で一位なってるで」みたいになってました。

　ですのでこの作品は時間をかけて世間に認識されて行って、ニコニコ動画で人気になったことをきっかけに、カナダのフェスティバルを企画してる人から「上映しませんか」って声をかけていただいたんです。だからなんかその完全にＹｏｕＴｕｂｅとか、ニコニコ動画が盛り上がっていく流れに沿った形で評価を受けたって感じだったので、こういうことが「時代に後押しされる」っていうことなんだなっていうふうに思っていましたね。

　私自身インターネットにそもそも弱い方だったので、ニコニコ動画の、画面上に文字が一斉に出てくる仕様にただただ怖いと感じてました。だからそんなに嬉しいとか、ああやっとここに来たか、っていう実感はなく、何が起こっているんだろうかっていう感じで受け止めていました。今ではそれがいろんなことに波及しているので、ありがたいなと思ってはいるんですが、そもそもは無断転載だよねって言いたい気持ちもありますね。あっ別にいいんですよ？

濱田：そして「赤ずきんと健康」の発表と共に就職され、広告代理店のデザイナーとして社会人になられたんですよね。

井上：はい。そうなんです。

濱田：井上さんは大学を出たあと、当時はＳＮＳなどが無かったので、ブログをずっと更新されていたんですよね。

井上：そうなんです。なんか今もブログをやってるんですけど、やってるというか、まあ最近はＳＮＳもあったりして、ブログは更新してないんですけど。

濱田：ブログには、井上さんの心境であったり、ご自身に起きたことであったり、いろんなことが書かれてまして、今回は当時まだテレビにご出演される前の井上さんを知る上でも、ブログ記事を少し掘り下げたいなと思います。

井上：はい。今回ユニークなのは、ブログをもとに話を展開しようとすることで、そんな企画をする方は今までに一人もいなかったんですよ。なんか皆さんすごく貴重な機会に立ち会われてると思って聞いてください。ブログはオフィシャルサイトからリンクしておりますので。

濱田：膨大な量がありますので、是非皆さんご覧ください。では早速。二〇〇八年五月十三日の投稿で「上品でやや変なポーズ」っていうことなんですけど。これは一体何……でしょうか。

井上：これは思い出すに、パパ・タラフマラっていう劇団があって、その劇団の小規模のイベントのチラシを頼まれて作っている時のラフスケッチですね。当時、以前に見たパパ・タラフマラの劇中のポーズが割と印象的で、それに見合うポーズを考えようとしている時の投稿だったと思います。

濱田：なんか今の井上さ

画像⑧　ブログ2008.5.13
上品でやや変なポーズ

んの作品にも登場するような趣深いポージングですね。

井上：今と一緒ですね。

濱田：で、ここに丸が付いていて、これが一番複雑なポーズとも見て取れますが。

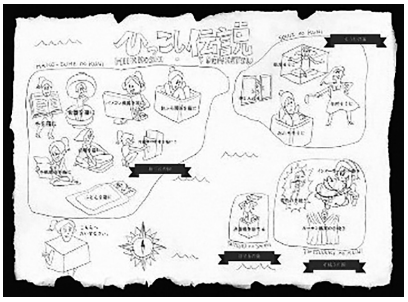
井上：これが多分採用案ですね。このポーズのデザインをチラシに入れたんだと思います。

濱田：なんて言うんですか、人間のプロポーションがギリギリ崩れてないのと、直筆の線がほぼ一本線で描いて、描く力が高いなと感心してました。次の記事をご紹介したいと思います。タイトルが「ひっこし伝説」。

井上：スクリーンに映った文字読めますか？ちょっと薄くて後ろから見えないかもしれない。

濱田：これは、二〇〇九年一月二十一日のブログでして、大学卒業して二年後ですね。その当時の引っ越しの状況が書かれています。前後のブログを拝見すると引っ越しの準備が一向に進まないんですよね。

井上：そうですね。やることをいろいろイラストで描きだしてた投稿で、今でいうタスク管理ですよね。各項目を区分けして、例えば台所掃除とか、風呂掃除、最後はここの掃除、という具合に。この時はそれぞれの項目を国に例えて分けてますね。イラストの左をご覧いただくと、これは箱づめの国。で、その国のなかでパソコン機器や、お風呂関係を箱に詰めるとか。なんかやるべきことを全部タスクとして書き出しているんですね。でそれを一つできたらこう消していき、というのをブログ上でやっていたんですね。なんで？って感じですよね。



画像⑨　ブログ2009.1.21
ひっこし伝説

濱田：面白いのが手続きの国にあるインターネット手続き。

井上：私、手続き系が本当に苦手で、あの誰かに連絡してカーテン購買の手続きや電気の通電手続きなど。ここに描いてあるのはインターネットの手続きですね。地球上に線がこう飛び交っているイラスト。インターネットのイメージが古いですよね。当時ＣＭでありませんでした？こういうの。そういう苦手なことを自分が楽しくなるように、手で一つ一つ描いて、進めて行こうとしていたのブログに上げていたということですね。

濱田：いやあ、これ描いてればそりゃ進まないですよ。

井上：現実逃避も兼ねてるんですよね。

濱田：そして、この後一個ずつ消していく記事がブログに更新されていきます。

井上：そうなんだ。もう忘れていたので、今掘り起こされて恥ずかしいです。

濱田：次行きたいと思います。字が小さくて読みにくので、井上さんに読んでいただいてもよろしいですか？

井上：はい。えっと、タイトルが、「ガーベラ前のめり」本文も読みますね。

「やけに前のめりに咲いた今年のガーベラ。そんなに前のめりだと怖い人に目をつけられる

画像⑨の拡大

画像⑩　ブログ2009.318
ガーベラ前のめり

よ。ということで体育館裏に呼び出されたガーベラ」

濱田：普通、前のめりで咲いたガーベラをここまで飛躍しないですよね。この時に既に井上さんの表現の世界観を感じるなと思って紹介しました。前のめりに咲いたガーベラが不良に呼び出されるストーリー性。

井上：まあねえ何なんですかね。日常をこうちょっと面白おかしく捉えたいなというのがあったんでしょうね。

濱田：じゃちょっと次に行きたいと思います。

井上：はい。これも読みましょうね。えっと、タイトル「テルテル坊主脱走」

「小さなテルテル坊主には梅雨はあまりに荷が重いのでした。逃げよう。」

濱田：「テルテル坊主脱走」ってもう「びじゅチューン！」にありそうですね。

井上：あのナレーションだ。

濱田：面白いのが今の「びじゅチューン！」作品にも通じる、日常的な対象物や何気ない事象を分析して、擬人化して、ご自身の表現の題材にされている点なんですね。

井上：そこまで考えていたかは分かんないですけど。

濱田：まあそのなんか日常的に行っていることとか、ものを見る時にこういうふうに見ているとか、なんかそういったことを少しお話しいただいてもよろしいですか。

井上：当時は会社員をしていた時期で、とにかく日常が辛くて辛くてたまらなかったんですね。それで、自由な制作を行うことで、現実を楽しく捉えようと自分でもしていて、現実と向き合うための手段として、こういう制作も行っていたんだと思います。そういう時に作品として十分な仕上がりでなくても、載せて公開できるブログというメディアがとても自分の助けになっていた記憶があります。

　ブログを始めて美大生時代の感覚を思い出したっていうことを上司に泣きながら説明した記憶があります。広告代理店で広告デザインを仕事としてやっていたんですけど、広告ってやっぱりクライアントさんがいるものなので、自分の意思ってまずこう二の次三の次にしながら物事を決めて作っていかなければいけないんですね。それでもってとてもハードな要求も多いんです。そもそも作るのが好きで始めたことではあるんだけど、学生時代の制作の感じがすごく理想的だと感じていたから、当時はなんて言うんですか完成に向けて吸い込まれるように制作をできるって思っていたから、会社では思い通りに行かないことにかなりフラストレーションを抱えていました。

　なんかひょんなことから、ブログを始めて、学生時代の制作の感じを思い出して、当時の心境を上司に伝えた記憶が蘇ってきました。

濱田：ブログには他にもたくさんの井上さんが描いたイラストも載っています。そして井上さんの日常的な思いであったり、弱い面と言いますか弱音を吐く面があったり、今日は頑張るぞといった当時の心境も垣間見れます。ブログへの投稿は、井上さんのこれまでの積み重ねや表現性を知るうえで、大事な軌跡だなと思います。

井上：そうですね、大事なので恥ずかしくても消せないんだと思います。ここに歴史が刻まれているんで。

濱田：他にも、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、イラストだけではなくてパフォーマンスや、ダンスもやられていらっしゃいますよね。本当にたくさんのパフォーマンスをやられてるので、全て紹介していたらそれだけで終わっちゃいます。井上さんが在学中から二〇〇九年までの作品をご自身で纏めたダイジェスト映像があるので、こちらをちょっとご紹介したいと思います。

井上：お願いします。これも人前で、しかも大勢の方と見るのが初めてだと思うと、ああ怖い。不安だなあ。

今「サンビスタ」という作品のキャプチャーが映し出されているんですけども「サンビスタ」は就職活動に持っていくために作った作品なんです。この時ちょっとこう何ですかね、挑発的なムードになっていたのか、これを親に見せたら怒られました。なんかちょっと今では作らないだろうなっていう感じですね。

サンビスタって、吉永小百合さんがＣＭしていた太陽光発電のシステムでして、当時二〇〇五年ぐらいですかね、ＣＭが流れていたんです。そのサンビスタをモチーフに二人組のアイドルがサンビスタのコマーシャルソングを出しました。という設定で作ったムービーです。ほぼ今とノリは一緒ですね。

学生がＣＭ作りました的なノリで作ってたのがこの作品です。登場キャラクターが「ＤＶＤ恵美子」と「ＴＰＯ静香」だったかな、今写っているのが多分「ＴＰＯ静香」です。

だからあのＩｎｓｔａｇｒａｍの私のアカウント名が「ｄｖｄｅｍｉｋｏ」となっているのは、ここから来ています。

何なんだろう、当時「ナディフ」っていう東京恵比寿にあるギャラリー（二〇二五年に閉店）が企画した、アーティストの公募に多分応募するために作ったダイジェストで。

これでどうなれると思ってたのか気になりますね。ありがとうございます。

濱田：今、「ダイジェスト」を拝見してみても「赤ずきんと健康」とか「トップランナー」などの比較的可愛らしいアニメーションとパフォーマンスにはかなりのギャップがあったりします。それぞれに表現があって中にはシュールなパフォーマンスもあるわけなんですけども、一つの大きな枠組みの中でアニメーションとパフォーマンスがあると思うんですけども。

QRコード②
井上涼ダイジェスト
（2009時点）

井上：大丈夫ですか？（客席を気遣う）あの全然気にせず咳してくださいね。

濱田：いわゆるパフォーマンスとアニメーションの違いをお話いただけますか。

井上：えっとね、これ今見てて思い出したんですけど、そのさっき言いましたが「赤ずきんと健康」がネット上でわーって盛り上がって、でその次に作ってたのがパフォーマンスの映像だったんです。順番的にそれはなぜかと言うと、その意図せずネット上でわーって盛り上がって持てはやされちゃって、次どうしようっていうのがすごいこう迷走して、迷走の結果、ダイジェストに出てくる「ＳＦの魔女」になったんです。なんて言うんですかね、思わぬ評価を受けてしまって、どうしようっていうところで、全然アニメと違うことやろうって思ってやってたっていう面がまずあると思います。

それとあと働きながらと言うこともあったので、アニメをこうじっくり作るっていう時間がなかなか取れないっていうのが悩みの種でした。それで実写だと自分が映って良いと思える格好になってカメラを据えて撮れば、何らかのかたちはできていく。でそれを編集すれば何らかの一本の作品になるっていうことで、多分休みの日とかに撮影して作ってたんだと思うんですけど、時間をすごく長くかけずに作れる手法として、身一つでできるパフォーマンスっていうのを選んでいたんだと記憶しています。だからどこかのスタジオとかじゃなくて、家の中とかでやってたんだろうなと思いますね。

濱田：今ちょっとデザイナーをやりながらと、お話しされたんですけども、デザイナーという仕事をやりつつ、こういった個人的なアニメーション作品であったりパフォーマンスをされたりっていう表現活動をされていて、表現とお仕事、その中でおそらく葛藤があったり、どっちに重きを置くかっていうような、多分いろいろな思いがあったのかなと思います。お仕事されながら自分のやりたい表現活動やるっていうことについて当時の心境はどんな感じだったんですか。

井上：さっきのお話に重なっちゃうんですけど、やっぱデザインや広告っていうのがどうも自分に合わないなって思いながら勤めていました。すぐやめるのもなんだし、もうちょっと続けないと分からないかもっていう、せめぎ合いの期間が割と長かったんです。

　自分の作品を作りたいっていう気持ちが全然収まらなかったので、ああ、もうこれはアーティストとして自分の作品を作っていくしかないなと思って。作らないとおかしくなっちゃいそうなのと、仕事と作品を同時にやらざるを得ないなっていう感じで五、六年やってました。

　あのさっきのダイジェスト二本目にあった「デビュー」っていうのがその当時もうアーティストとしてもうデビューするって言っちゃおうっていう、見切り発車に近い感じで作った作品ですね。あの「デビュー」で使用している電話は、当時会社で使ってた電話を借りて撮影しました。

濱田：撮影の現場は？

井上：あれはスタジオを借りてるんですけど、後ろは会社の風景だったじゃないですか。あれね、会社の風景を撮影して、拡大したやつを一枚一枚Ａ３の紙に会社のプリンターで分割印刷して、それを貼り合わせて、めっちゃでかい背景を作ったんです。

濱田：そうだったんですか。

井上：そう画角を全部覆うぐらいの大きさの背景を貼り合わせて作ったんです。ダイジェスト（ＱＲコード②）の中で見れますので、後でどれどれと見てください。

濱田：その今ちょうど二〇〇九年までの話をして。その「デビュー」も二〇〇九年の作品だったわけなんですけども、やはりこの二〇〇九年っていうのが井上さんの中でも一つのターニングポイントになってまして。二〇〇九年に個展「井上涼　作品展示会「デビュー」（五月六日～十一日渋谷アップリンクギャラリー）も開催されるんですよね。

井上：はい。そうですね。

濱田：その同じ年にはパフォーマンスイベントに参加されたり、二〇一〇年にはデザインフェスタにも。

井上：ああデザフェスですね。

濱田：翌年の二〇一一年に「赤ずきんと健康」がトロントのジャパニーズショートフィルムフェスティバルで映画祭賞を受賞。翌年二〇一二年八月にＮＨＫ　Ｅテレの「テクネ 映像の教室」にテレビ出演されて、プロジェクションの技法を駆使した作品をご提供されています。それと同年の二〇一二年に「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」というアニメーションを発表されるんですけども、この「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」が第二十四回ＣＧアニメコンテストでこれも受賞されています。ですのでやはりこう二〇〇九年の「デビュー」という映像は井上さんの中で決心っていうか何かあったのかなって、思ったりもしました。

　そしてスクリーンに映っているこのキャプチャーは「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」の一部なんですけども、さっきからずっとお話いただいてきた社会人をやりながらもご自身の表現活動がしたいというその当時の葛藤であったりとかいろんな思いがこの「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」には詰まってるのかなと思いながら拝見しました。この後、皆さんにも「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」をご覧いただきますが、井上さんからこの作品についてお話いた

だいてもよろしいですか。

井上：はい。思い出すと金沢美大のＯＢの人が企画した、銀座で行うグループ展に出しませんかって声がかかったんですね。映像作品だったら一人二分までと決まっていて、でそれで二分の映像を作ることになって作り始めたきっかけがあります。で、お話にもあった通り、会社に勤めていて、火曜日というのがあのとても辛いというか、ここにも「まだ火曜日だわ」と出てますけど、その一日一日をどうにかこうクリアしていくっていうような生活をしていたので、そうすると火曜日って絶妙に重たいというか、まだ火曜日なのか、あと何日あるんだよ。みたいな感覚を常に感じていました。

どんだけ会社が辛かってんという話なわけですけども、その生活をアーティストとして表そうとしていて、私は自分が感じている日常の感覚を元にした作品を作らないと真に迫ったものにならないと思い込んでいる節があって。確か当時の自分は、その火曜日は辛いって思ってるところから作ってはどうかと考えていたと思います。

二〇一一年には東北の地震があって、作品をどうやって作っていくのかっていうのをみんなが迷っている時期でもあったんですね。なんて言うんですかね、様々な観点で自粛ムードみたいなのも強くて、頑張っていこうみたいな、呼びかける応援の題材のものしか作っちゃダメみたいな感じをみんなが勝手に感じていて。その動きを見ながら作品を作っていた自分は、世間のことを見ていて、それに対して自分ができる自分がやりたいギリギリの範囲、怒られたら怖いけど自分の実感を元に作らないと作品にならない。なのでこれぐらいで、これぐらいなら、なんかいいんじゃないかって作ったのが「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」だったと思います。ということで説明が長くなったけど見てもらってもいいですか。

QR コード③
YADOKARI

はい。これ二分を強調してますよね二分が持ち時間だったので。はいお願いします。

（作品を見て）

井上：今見るとなんか結構絵を頑張ってるなっていう印象を受けました。なんかすごいね。

濱田：これは作るのにどれぐらいかかったのですか？

井上：どれぐらいなんだろう、それでも二、三ヶ月じゃないのかなと思いますけどね、はい。グループ展をやろうってそんなに前もって言ってくれないだろうから。

濱田：この「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」を発表して、ＣＧアニメコンテストで賞を取られ、翌年二〇一三年からは皆さんもよくご存知の「びじゅチューン！」が放映されるわけなんですけれども。本当にどんどん世に出ていかれていって、有名になっていくっていうことが、表立ってくるわけですよね。

井上：はい。

濱田：そこで井上さん二〇一二年八月二十四日のブログで「有名になっていく私について」という投稿があるので紹介します。

井上：はい、じゃあ音読させていただきますね。

「私はこの先、もてはやされようと褒めそやされようと、右肩上がりに有名になってある日横浜アリーナのステージで四人目のＰｅｒｆｕｍｅとして歌っていようと、ぽっと出の後輩アイドルに先を越されて嫉妬に狂おうと、失敗して発売したＤＶＤがどんどん返品されようと……、だいたいいつでも『楽しみ』を作りつづけてまいります。誰の楽しみかと言いますと私と私以外の人の楽しみです。私だけ楽しいのでも、私だけ楽しくないのでもなく、両者が楽しいものが理想です。」

濱田：なんか本当に今の井上さんの姿と繋がってるなと感じます。

井上：私と私以外の人との視点を横断しようとしてるとこは今と一緒なのかなというふうに思いますね。あのなんか私は文章を書いてると。私の自意識がこう後から追跡してくるというか、追いかけてくる感覚があって、失敗するかもって不安を、右肩上がりに有名になってとか、ある日なんとかかんとかと、どんどん枕言葉を増やすことによって自意識を保とうとしているのが見て取れて、この人大丈夫かなって自分でありながら思いました。

濱田：本当にこの飾らず正直に進んでいく、っていうのは当時から同じで。また、ここで言葉として、これまでとこれからの意識を明確に書かれてるぐらい強いお気持ちがあるんだなと感じました。

井上：そうですね。言葉にすると叶うみたいな。多分それを信じてた頃なんだと思います。

濱田：そして二〇一三年の八月ですよ「びじゅチューン！」が開始されたのは。日本全国の老若男女を虜にする「びじゅチューン！」なんですけれども、この「びじゅチューン！」をお話しすると、多分ものすごく長くなっちゃうので。

井上：そうですね。あと二日かかります。

濱田：一つ一つの作品にストーリーがあって、井上さんの思いもあるかと思います。ですので、今回は大きく二つの観点で、「びじゅチューン！」について井上さんにお話しいただきたいなと思います。

　一つ目は「共感するシチュエーションと自由な井上ワールド」でもう一つが「井上音楽の中毒性」

井上：あっ笑いが起こってる。だよねだよね、みたいなこと？

濱田：お話を聞いてみたいと思うんですけども、その「共感するシチュエーションと自由な井上ワールド」なんですけども。「びじゅチューン！」で言うところの「再配達には金印を」や「平熱でうらめしや」など。その気持ちよく分かるっていう共感が人の心を引き付ける魅力の一つに感じていて、はたまた、あの「見返りすぎてほぼドリル」とか「ムンクの叫びラーメン」とか「縄文土器先生」といったような、共感では無く、井上さん目線の自由で斬新な捉え方といういんですかね。細分化すればもっと深く、多岐にわたる表現があるんですけど、大きく「共感」と「自由」この二つの観点をお話しいただけますか。

井上：はいはい。考えてみると、さっき見た「ＹＡＤＯＫＡＲＩ」とやっぱり同じことをやっているのかなというふうに思います。

　私の日常的な実感を、みんなも同じことを思っていそうだという想像を元に作品を作らないと、人の心に届くものにならないと思い込んでるところがあります。それが、共感するシチュエーションを探して作品に盛り込もうとしている由縁だと思います。

　もうひとつの「自由な井上ワールド」そうですね、多分これは目を引くような工夫をしないと、みんな見てくれないっていう意識もすごく強いので、飛び道具的な思考からの観点なんだと思います。それを今「自由」と言って下さったんだと思います。だから人に見てもらうっていうのは、飽きさせないと言うのか、面倒くささを超えてもらわないといけないことだから「あっ私もそれ思ってた」「あっ分かる分かる」っていういわゆる「あるある」的感覚があったら、作品に一歩入ってきてもらえるし、はたまた「見返りすぎてほぼドリル？」みたいな。どれどれ見てみようって感じで、また一歩入ってきてもらえる。なので、どっちも人に見てもらうための、きっかけとして考えているのかなというふうに思います。

濱田：それでシチュエーションとしてＯＬであったり、会社であったり、全てではないですけど、身近な社会をモチーフにした目線を感じるんで

すね。

井上：会社勤めをしていたのもあって、自分のことをＯＬと認識していた時期があったんです。まあそれがなんていうか本気でというよりも、「私ってＯＬだから…」って、ちょっと自分を可笑しみをもって捉えるために「ＯＬ（笑）」的に感じで捉えてたんだと思うんですけど。あと女性にシンパシーを覚えることが多いので、その気持ちわかるなと思ったら大体その対象が女性であることが多いです。自分に引き寄せて作品を作りたいという背景があったことから、作品に現れているのが一般的に女性的とされる面なんですね。言葉に気をつけながら言いたいんですけど、だから自分というフィルターを通して作品を作ると、自分の意識とかが、女性的な方向に寄っていくんだと思います。

濱田：ありがとうございます。では次の一度聞いたら頭の中で回り続ける「井上音楽の中毒性」なんですけれども。

井上：申し訳ない。好きとは限らなくても頭の中に残るってネットに書かれていることがあって。

濱田：今日はそんな悲観的な話でなくて大丈夫ですので。やはり一度聞いたらすっと入ってくる。そして、ジャンルフリーなんですよね。ジャズがあったり演歌っぽい曲もあったり。ジャンルフリーの作曲力って凄いなと思います。メロディはどんなふうに湧いてくるんですか？

井上：えっとですね、今回事前に質問で聞くよって言われていたので考えてたんですけど、言葉が持ってる音をそのままメロディにしたいんです。

　言葉にはそれぞれが持っている調子とか音階みたいなのがあって、それをメロディにしたいっていうのがあるんですよ。椎名林檎先生も言ってたんですけどね。

　言葉自体が持ってるリズム感とか、テンポ感っていうのがあって、それを例えば、私の曲の「風神雷神図屏風デート」とか「アルノルフィーニ夫妻のベルト防衛戦」などをご覧いただくと分かりやすいのですが、その単語通りの音階や、言葉がそもそも持っている節回しみたいなのを生かそうとしています。「びじゅチューン！」の場合だと、作品名などの固有名詞が出てくるので、その固有名詞の印象を小さな子でも覚えてくれるような感じで作っていこうとしていてます。そういう要素が合わさってメロディーができてきます。

　あと、ジャンルフリーと言ってくださいましたけども、Ｊ-ＰＯＰが元々好きで。最近では割とＪ-ＰＯＰという概念が曖昧になってきているなとも感じるんですけど。

　小学生ぐらいの時にテレビの音楽番組ではその週のトップ10みたいなランキングがあって、その中には様々なジャンルの曲があって。その玉手箱みたいな感じがすごい好きだったんですね。

　ロックとかバラードとか、ちょっとジャンルの名前分かりませんけど、いろんな調子の音楽が入っていて、その感じを「びじゅチューン！」でも作りたいなと思ってるんです。「びじゅチューン！」で取り上げる美術作品もいろいろなものがありますし、それを多彩な感じで、様々なジャンルに触れるように表現したいなと思っています。

　あと私、すごく特徴的な声をしていて、だから同じような曲を作ると本当に同じようにしか聞こえないんです。クセが強い声なので。昔の作品が結構棒読みだったと思うんですけど、棒読みだとあんまりこう多彩にならないので、歌い方も叫んでみたり、小声で歌ってみたりといろいろ試すことによって多彩にしようとしています。ちょっと喋りすぎた？

濱田：いやいや、やっぱいそういう苦労が背景にはあったんですね。

井上：そうですね。苦労というか、まあ見て欲しいという思いですよね。

濱田：作曲する際は鍵盤とかも使うんですか？

井上：そうですね、片手で弾くくらいで使っています。鍵盤をパソコンに繋いで録音しています。

濱田：「びじゅチューン！」には本当にたくさんのアニメーション作品があるわけですが、皆さん高村光太郎の「手」という彫刻作品はご存知ですか？　そうです「びじゅチューン！」でも登場しますよね。この「手」は井上さん作品の中では「指揮者は手」という作品で紹介されます。「手」は高村光太郎が一九一八年に制作した作品でして、実はこの作品は碌山美術館にもございまして、現在展示しておりますので、ぜひ碌山美術館でご覧になってからお帰りください。

「びじゅチューン！」にはそれぞれの作品にストーリーがあります。井上さんには一作品一作品丁寧にお聞きしたいところではありますが、二日かかってしまいますので。

井上：一曲一曲言ってたらね一ヶ月かかりますね現時点で一二六曲ありますから。

濱田：合宿ですね。「びじゅチューン！」についてのお話はこのあたりまでとさせていただきたいと思います。

続いて、井上さんの最近の大作としてEテレでも流れていた「ツバメレインボーバージョン」を皆さんご存じでしょうか。

その「ツバメレインボーバージョン」というのはやはりこうLGBTQの観点が関わってくるわけなんですけれども、LGBTQに関して井上さんが抱くお考えや思いがあるかと思います。次は「井上涼とLGBTQ」についてのお話に移りたいと思います。

井上さんはご自身でもゲイであることを公表されておられます。これまでもいろいろなことを考えられて、悩んだ時期もあっただろうし、様々な思いがおありかと思います。ブログにもある時期までは毎年五月から六月に差し掛かる時分にご自身がゲイであることをとても丁寧に綴られていらっしゃいます。

二〇一二年五月十二日のブログの投稿に「カミングアウト七周年」というの記事がございます。そちらをご紹介したいと思います。

井上：じゃあまた私の方で読ませていただきます。多分画像もついてるんだと思うんですけど文章だけ読ませていただきます。

（読み上げて）

はい。なんか読んでる今の自分も恥ずかしいですね。

濱田：このブログの中でご紹介されている映像作品というのは、大学の三年生の時のゲイをカミングアウトされた映像作品です。カミングアウト七周年の投稿の時に初めてこの映像作品のリンクが貼られてたんですよ。皆さんにも今日その作品をご覧いただきたいと思います。

井上：本当に二十年近く前の作品なので、私の知識も今と全然違うものだと思って聞いて欲しいです。大丈夫かな。恥ずかしい。

（作品を見て）

濱田：井上さんからもお伝えいただいたように、井上さんと私は同じ大学の同級生なので、大学時代にこの作品発表を私も拝見していました。人が行き交

QRコード④
指揮者が手

QRコード⑤
ゲイの歌2005

私の髪が短いですね。
ゲイの人には短髪が好きな人が多いので、モテたくてずっと短くしておりました。モテはしませんでした。今はなんとなくダラダラ伸びて、アニメに出てくるたまにするどいこと言う地味なキャラみたいな髪型になっています。

私が行っていた金沢美大の課題で、「自分のアイデンティティをテーマに何でもいいから作ってちょうだい」みたいなのがあって、「じゃあカミングアウトしようかしら」と作った作品です。
(それほど軽い気持ちではありませんでしたが。)
ずっと絵を描くのと音楽が好きだったのでそれを一つのアイデンティティとして、それを以ってゲイというまた別のアイデンティティを表現するという、アイデンティティにアイデンティティを塗りたくったアイデンティティの盛り合わせ1260円！みたいな作品。
いま見ると恥ずかしいです。
でもこれを作っていろいろなことが楽になりました。

画像⑪　ブログ2012.5.12　カミングアウト７周年

う広めのホールにモニターを置いて発表されていましたね。

井上：そうですね、ちょうど今みなさんがいらっしゃるこの会場ぐらいの大きさで一クラス分の課題の発表をしたんですけども、私この時すごい場所を使って、他のクラスメイトを圧迫しながらこの作品を展示した覚えがありますね。

濱田：僕も当時拝見させていただいて、いきなりのカミングアウトだったものですから、ハプニング的な衝撃を受けましたし、作品は専攻を越えて話題になりました。でも、みんな表現者として一番大事な自分のアイデンティティを、あれ程までに正直に表現していく井上さんは凄いな、と友人たちと会話をしたことを覚えています。

　ＬＧＢＴＱに関してのお話っていうのは、その時その時代でやっぱり少しずつ違ったりしますし、感じ方や捉え方、社会への発信の仕方も違うのかなと思います。今の井上さんが、このカミングアウトされた当時を振り返って、なにか今と異なるような心境を感じたりしますか？

井上：そうですね、あの当時は今よりもっとこう挑発的で、ゲイであることに関しては、なんて言うんですか仲間というか、味方がいないみたいな、ちょっとこう「一人四面楚歌」みたいな感じでした。友達はいっぱいいて、みんな優しくて、信用もしてたし大好きなんですけど、自分がゲイだっていう面を開示すると、人はなんか、人によっては友達じゃなくなるんだろうなとか思っていました。当時はまだ世間的に伝わりにくいものがありました。今はＬＧＢＴＱという言葉が説明なく出てきても、伝わる人が多くなっていると思いますが、当時はまだその「ＬＧＢＴ」っていう言葉が本当に日本の一部でしか使われていなかったと思うので、そういった背景のなかで、そうだな本当にちょっとこう背水の陣みたいになってて。あの一人本能寺？みたいな、なんて言うんですかこう良い例えが出てこないのですが、誰を相手取ってやってるのかわかんないんですけど、刺し違えてでも研ぎに研いだ刀で飛び込んでいくみたいな、そういうつもりがありましたね。でもやっぱり友達のことはみんな大好きだったので、あんまり攻撃的なことはしたくなくて、自分の内面は今よりもすごい攻撃的で、口もすっごい悪かったんですけど、そういうのは作品に出したくなかったので、多分自分なりのユーモアで可能な限りくるんだ形がこの作品なんだと思いますね。だから今見るとちょっとなんて言うんですか、私は自分の攻撃性の高さや内面を知ってるので、そう感じると、今ではちょっと見るのが辛い作品になってます。でも、今はもう少し、そのＬＧＢＴＱの立場の友達も増えて、世間でもそのＬＧＢＴＱという言葉が浸透した面があるなと感じています。多分当時の自分は、ゲイであることを武器だと思い込んでいた部分があって、けど今はもうなんて言うんですかね、当たり前に近いものに思っています。ただ、世間の認識はまだ全然当たり前には至っていないとも思います。特に国の動きとかに関しては。浸透って言葉の選択も少し違うのかなとも感じます。

濱田：当時大学の中で、井上さんの映像を見て、みんなとは違う自分の内を表現に変えても良いんだ。と思えた人はいたと思います。やっぱりなんて言うんですかね、井上さんが誰かの背中を後押しするというよりも不安とかそういった悩みを抱えているか方々に寄り添うような存在になっていらっしゃるなっていうふうに当時僕は思っていましたし、井上さんをきっかけとして空気感が変わったことも実感しました。

井上：私自身には作品を発表したことの影響とか、そういった反響の声が届いてこなかったのですが。やっぱなんか攻撃性高すぎたのかな。

濱田：表現の幅の広さや、新しい時代の価値観を気付かかせてくれたような、時代のなかで井上さんは大事な存在だったんじゃないかなと思っております。

井上：そうなんだ、ありがたいですね、もう二十年近く経ちますね。

濱田：そして、二〇二四年三月に「ツバメレインボーバージョン」が放送されたんですけども。一ヶ月の短い期間だったんですよね。作品の観点の一つにＬＧＢＴＱが表現されていますけれども。この作品は本当に大作と言いますか、多角的な観点が丁寧に表現されています。

最新作の「ツバメレインボーバージョン」についてもお話をお聞きしていきたいと思います。

ＬＧＢＴＱっていう一つの観点がもちろんこの作品にはあるかと思うんですけども、何かこうそこに限定するんではなくて、もっと多角的に、多くの人が行きかう街であったりとか、社会やあと様々な場面で様々な人が抱える心境であったりとか、隣の人その隣の人、また遠くの人っていう、なんか不思議な、全然知らない人との不思議な繋がりが優しく描かれていて。

井上：うんうん。

濱田：限定するのではなく、ふわっと包み込むような、なんか井上さんだからこそ描ける多角的な視点の作品だなあと思いました。

簡単な言葉で申し訳ないのですが、作り込みもすごい感じられましたし。井上さんがこの作品ですごい苦労された点とか、皆さんにこういったところ見てほしいとか、思いの丈を今日は思う存分話していただきたいんですけども。

井上：ありがとうございます。説明してなかったんですけど、これはＮＨＫから制作依頼がありまして、ＳＤＧｓという言葉を皆さんよく耳にされると思うんですけど、持続可能なゴールを目標にした取り組みで、それで「ツバメ」という曲もＮＨＫの取り組みの一環で、何本も映像を作って放送しています。その中で、ＬＧＢＴＱやセクシャルマイノリティについてのメッセージを載せた作品を作ってくださいっていう依頼が私のところに来ました。

去年ですけどセクシャルマイノリティの人が「隣に住んでいたら嫌だ」と政治に関わる方が発言されたのが問題になりました。それは極端な発言だったんですけど、考えると、身の回りにはいないって想像が先行して、ＬＧＢＴＱの人が隣に住んでいるかもしれないと想像することは難しいんだろうなって思いました。

そういう考え方や想像にハードルがあると、話は進まないですし、そこに一つ大きな課題があるのかなと思いました。なのでアニメの中にはもう本当にたくさんの人が出てきて、その中の誰かがＬＧＢＴＱなのかもしれない、けれども見てる人はそれが誰だかはあんまり分からない。そんな状態でアニメーションが流れていって、最後にお家に帰ったときに、もしかしたらあの人がゲイだったのかなと感じるような、私が今、日本のテレビで流れるものとしてこの「ツバメ」を作るにあたって、そういう構造の作品を作ったって感じです。

だから誰だが分からない隣の人は、どんな人だかは分からないけれど、その人たちが送る心地よい生活ってどんな感じなんだろうって想像をちょっと膨らませることを促したくて作った作品です。なんかあの言葉が難しい。

濱田：この作品は「びじゅチューン！」とは違う作りと言いますか、キャラクターの表情も異なるのかなと思います。普段制作される作品との違いなどお話しいただけますか？

井上：そうですね、皆さん「モブ」って言葉がありますけど、ご存知ですか。

ご存知ない方のために説明しますと、アニメなどの背景で歩いている人とか街の中の主役じゃないけど後ろに歩いている人たち、役名も無いような存在のことを「モブキャラ」って呼んだりします。それがそのま

ま俗語として転じて「モブ」という言葉が日常会話で使われるようになりました。この企画は出てくる人全員が「モブ」であって、そのモブの人がどういう生活をしているのか一歩進んで想像してみましょうっていう感じで作ったんですね。なのでモブキャラがいっぱい出てこなきゃいけない大前提がありました。だから顔も同じような点々の目と口と鼻ぐらいの構成要素でみんな同じような顔をして、みんな同じように歩いていたりします。ただ、歩き方がそれぞれ僅かに違っていたり、持ってるものが当たり前ですけど違って描かれていたりしています。

「びじゅチューン！」ですと、背景に人は一人も歩いてないんですよ。モブキャラとかもうそんな描いてる余裕がないから。

今回はそのモブキャラに生活があるっていうメッセージを作りたかったので、そのモブキャラをしっかり描かなきゃいけないということで、もうひたすら二〇二三年の年末十一月ぐらいまで歩く人ばっかり描いてました。私はどちらかというと回転する人とか、踊る人を描きたいんです。横に平行移動して歩く姿を描くのが本当につまんないと思っていたのですが、今回だけはそれをちゃんとやらなきゃいけないということで、毎日毎日歩くところを描いていましたね、それが本当に修行のような感じでした。

そのＬＧＢＴＱという言葉を取り巻く日本の状況もこう二転三転しているなっていう印象を去年は強く感じて、ゲイである自分は、割と非難の的になることはないけど、トランスジェンダーの人は世間で叩かれていたりして、私の友達にもいるので、そういった切迫したものが感じられるなか、世間で自分が見えている日常と世間の流れのギャップみたいなものを強く感じて、これを作るのに掛かった半年の期間中も、すごくそのギャップが大きくどんどん離れて行くような感覚もありました。

作り終えられるのかっていう不安も強くて、そうするとですね、私寝ちゃうんですよね。不安が募ると。現実逃避して作業が進まないんですよ。しかも好きじゃない動きを描くから、どんどん作業が遅れて、それでもう締め切りもどんどん破っちゃって、いろんな意味で火の車みたいになって、そしてできたのがこちらです。

レインボーということなんですが、このＬＧＢＴＱの政治的アクションの象徴として六色の虹がパレードなどで国際的にも用いられていています。一般的に虹は七色ですけれども。

私の作品の中では虹は六色でかつ、まだできていく途中であるという表現に留めています。えっと今の日本において、私にはその、まだレインボーがかかっているというふうに表現することはどうしても無理だというふうに思っていて、ただ、さっき上映したゲイをカミングアウトした作品を作った二〇〇五年と今を比べると格段に進んでいるとも思っています。ですので進歩も認めたいし、今自分が見えている友達や仲間たちと同じＬＧＢＴＱの立場の人たちが世間的に叩かれたりする現実も伝えたい。どっちも伝えたいというふうな思いから、まだ途中の虹の表現に留めています。捉えようによってはレインボーを壊しているという表現にもとれるので、とても怖いんですけど、どうしてもこうでしか描けないということで、虹がアーチになりつつあるという表現にしました。

だからちょっと喋っていても不安で仕方ないんですけど、そうですね、なんて言うのかな、作品ができて良かったなと思います。

濱田：井上さんだからこそ描ける境地であったり、表現のかたちだと思いました。

井上：ただ、本当にもう二度やりたくない。この作品が二〇二四年三月の頭に完成したんですが、三月中はもう本当に何にも手につかなくて、別の仕事の締め切りもどんどん破ってしまって、今そ

QRコード⑥
ツバメレインボーバージョン

の余波で苦しんでるところでございます。

濱田：さてそろそろお時間も迫ってきました。今日井上さんからたくさんのお話をお聞きしたわけですけれども、最後に「井上涼のこれから」ということで今後やってみたいこととか、これからの展開であったり、社会に望むことであったり、井上涼のこれからの姿をお話しいただけますか。

井上：はい。えっとですね私十年以上「びじゅチューン！」いう番組をやってきたんですけど、そうすると五分の小さな番組なので最初は全然認知されず、九年目くらいからやっと「びじゅチューンね」って言われ出した認識が私の中にあります。それでだんだんとなんか文化人の人みたいな感じになってきて、この間は「日曜美術館」に呼ばれて「びじゅチューン！」の井上さんですって紹介されるかと思っていたのですが、そういうわけでもなく「びじゅチューン！」の映像も流さずに「井上涼さんです」って紹介される珍しい登場の仕方をしました。今『文藝春秋』の依頼で「びじゅチューン！」の十年についての原稿も書いていて、なんか自分が文化人っぽくなってきていて、なんか自分のなりたかった像とややずれているのを実感しています。

やっぱり私は、作品をじゃんじゃん作る方がいいなと思ってるんですね。なので質問への答えがぼやけてきましたけど、まずは作品を作っていたいなっていうふうに思っています。今はちょっと「ツバメ」の余波であんまり他のことができないんですけども、もうちょっと元気になってきたらやりたいなと思っています。でもその「日曜美術館」という老舗番組に呼ばれる人ってやはり文化人的だからであって、その番組に呼ばれるようになったっていうことは、何て言うのか、自分がやってきたことへの正当な評価の一つでもあると思います。なので、なんかもう全部もう出ませんみたいな感じにするよりも、出た時に自分が言えることを可能な限り言うっていうことを続けていきたいなと思います。なんというか、具体的に「びじゅチューン！」の応援上映がしたいとか、そういった返答ができれば良いんですけど、あんまり具体的にこれがやりたいですって言うのが苦手なタイプでもあるので、パッと出てこないんです。ただ「びじゅチューン！」と離れたところでの作品も作りたいなと思っているし、なんかいろいろあれがいいな、これがいいなとは思うんですけど、明確にこれですと言える感じでもないんです。とにかく「ツバメ」の余波はすごいです。でも「びじゅチューン！」の新曲は六月七月八月に放送することは決まってるので、今はそれを頑張っていくぞと準備を始めています。

でも番組っていつかは終わっちゃうので、そうだな、そのいつか終わることは分かっているので、その終わりをちゃんと終わらせるっていうことをきちんとやりたいなというふうに思ってます。

濱田：ありがとうございます。今回井上さんといろいろお話をさせていただくにあたって、大学卒業後からの約十五年に亘るブログを拝見しました。その一つの印象として、ブレないと言うか、変わっていないなと強く感じました。その時々の感情や経験の蓄積はあるんですけども、どの作品にも作為的な印象がなく、強い面や弱い面が見え隠れするような、良くも悪くもありのままの姿で、というのがやっぱり井上さんの魅力なんだと改めて感じました。

だからこそ共感も与えますし、不安や迷いを感じている人たちの背中に優しく手を当ててくれる存在ともなります。

お話をさせていただく中でも、自分を飾らず素直に、また正直に表現されているのが改めて伝わってきました。様々な人の目線に立ち、多角的に表現された作品そのものがアーティスト井上涼なんだなと思いました。

以上で今日のトークセッションの方は終わりにしたいと思います。少し質問コーナーを設けたいと思います。どなたか井上さんにご質問してみたい方はいませんか。

参加者：井上さんの作品とかお話を聞いていて、なんか絵本の世界みたいだなと感じました。井上さんには好きな絵本ってありますか。

井上：『11ぴきのねこ』が好きです。お好きな絵本は何ですか？

参加者：あの『きょうはそらにまるいつき』という絵本が好きです。

井上：初めて知りました。見てみます。

参加者：えっといつも「びじゅチューン！」を家族で楽しく拝見しています。先月の横浜トリエンナーレのトークショーも息子と夫で行かせていただきました。

私もデザインをしていて、美術系の大学にも行ってたんですけど、自分の作品と自分は切り離せないものになってしまって、先ほどゲイを作品として公表されていらっしゃいましたが、私は自分を表に出すのは怖いことだなと普段思っていて、自分の思っていることを書いたり、絵にしたりっていうのはなんかこう、裸を見せたりとか血を流してるみたいに感じてしまいます。井上さんはこの怖さとかとどう付き合っておられますか。

井上：なるほど。ありがとうございます。ええとそうですね、どうしても自分が出ちゃう怖さっていうのはやっぱりおっしゃる通りあるんですけど、その怖さというのが自分が怖いって感じが強いほど、人に届くかもしれない、またそういう可能性が高まるっていう感覚も同時にあります。自分がちょっと怖いと思う観点まで行かないと、むしろ見てもらえるようなものにならないっていう脅迫観念めいたものがあると、逆にこれでいいのかもしれないっていう感覚も生じるので、なんか怖いけどこっちがいいんだろうなっていう、なんかこう目を閉じて押し出してるような、何かに対して作品をこう押し出してるみたいな感じでいますね。だから怖くて正解だと思っている感じです。どうでしょう。

参加者：ありがとうございます。

井上：大丈夫ですか？ こういう時って皆さん私がなんか言ったあと「ありがとうございます」と言って終わっちゃうんですけど、なんか疑問感じたら言ってくださいね。じゃあ次の方。

どうぞ。

参加者：今年から高校生なんです、小学生の頃から「びじゅチューン！」を見させていただいています。井上涼さんにも憧れていて、バンドを組んで、作曲も自分たちでやろうとしています。ただ、どうしても作った曲がなんか誰かに影響されているような感じがしています。影響されないようにする秘訣っていうのを教えていただけますか？

井上：私も影響されたものがそのまま出てて、なので影響されたものが出てもまず大丈夫っていうのが一つあります。それがあまりにも出ちゃってるなって自分で思って冷めちゃうんだったら、私だったらここが影響されてるなっていうところを突き止めて、それをもう削っていくしかないんだと思います。例えばコード進行が似てるなと思ったら、このパートを削ってみようとか、真逆なことをしてみようとか。

ただ最初に言ったように影響が出ちゃってても全然いいと思います。私は宇多田ヒカルが大好きで、影響を受けてるんですけど、多分バレていないと思います。それは私の声が宇多田ヒカルと全然違うことが大きいと思います。だから私が歌える曲を作らないと歌えないということもあるので、まず自分にできる違うことを探すっていうのも手かなと思います。だから一つはどこが似ちゃってるのかを厳密に確かめる。でそれを削れるかどうかやってみる。が具体的なアクションだと思います。削ると自分がなんか盛り上がらないなとか、もうこれ自分がやることじゃ

ないなっていう感覚があるんだったら、それは出ちゃっててオッケーだと思ってやる。でなんか一つでもちょっと違うものを入れてみるとか。ガラっと変えるのって難しいし、どんな音楽をやられてるのか分からずに言ってるのでちょっと現実と合ってないかもしれないんですけど、似ちゃってるものに対して何かを加えてみるとか、なんか少しでも変えてみるというのが、ガラっと一八〇度変えるより二〇度変える、なんかそういう感じかな。極端に変えようとしないことも大事だと思いますね。極端に変えようとすると、ああじゃあもう解散みたいになっちゃうんですよね。人って大抵。でも続けていくと、だんだん自分にしかできないことが加わってきたりするんですよ。だから続けることを優先してみたらどうかな。だから続けるために何ができるかなって考えてみるのもいいのかなって思います。

参加者：ありがとうございます参考にさせていただきます。

井上：ではそちらの次の方。

参加者：ありがとうございます。私小学校の先生をしています。井上さんはクラスでも大人気で授業でも紹介しています。今日、お話を聞いていて、自分の好きなことをしたいっていう明確にこう筋の通った方だなって感じました。私も自分のクラスの子供たちにそんなふうになってほしいなと思ったんですけど、井上さんみたいに自分の好きなことを突き詰めていく、もしくは追い求めていくような大人に子供がなるにはどんなことが必要なのかお聞きしたくて。先生として私がどんなことができるかお聞きしたいです。

井上：難しい。どうなんだろう私も今四十歳でして、四十歳でなんかこの仕上がりだから、なんか小学生が私のどこを真似できるのかっていうと分からないんですけど。私はとにかく自分が何を好きなのかを文字にしないと把握できないので、映画とかも好きでよく見るんですけど、好き嫌いも、何が嫌いなのかを文章にして自分がどんなものが好きなのかを割と言語化して確かめるようにしています。人間っていろんなものに影響されるから、これ好きでいたいとか、別に好きでもないのに流れで今はこれを好きでいたいなとか。私自身、流されていくことが多いので、文章にしてると、これは好きになりたいだけじゃないかと自分で気づくことができるので、客観的に見て自分が何を好きなのかを厳密に確かめるようにしています。でも小学生にね「ちょっと言語化してみなさいよ」と言っても無理があるので、とにかく何でも見てみるっていうのがいいのかなと、当たり前の答えになってしまいますが。

参加者：確かに、なんとなくってことが多いと思うので、どうして好きなのとか私もちょっと声をかけてみようかなと思いました

井上：そうですね。でも私の印象だと小学生って「なんで？」って聞くと「なんでも」とか「好きだから」とか言うじゃないですか。そこをうまく例えば「びじゅチューン！」の「どの作品のどのタイミングが好き？」とか。なんか具体的に聞き出してあげると思考が動いていくのかなというふうに思います。

参加者：ためになったので職員室でみんなに話したいと思います。ありがとうございました。

井上：はいじゃあラスト一人で。じゃあ後ろの方。

参加者：本日はどうもありがとうございました。せっかくこの碌山美術館さんの主催でやってるもんですから、荻原守衛の作品ご覧になって正直どういうご感想をお持ちになられましたか。

井上：そうですね昨日、初めてこちらに伺って、案内していただきながら一通り見たんですけど、難しいですね。正直にと言うわけでもなく、正直って言うとなんか本当は嫌だと思ってるみたいな誤解を生むし……。どう言えばいいんだろう、私は碌山のことを元々知らなくて、こちらに

伺って碌山が高村光太郎と接している人物だと歴史的な捉え方をしました。

作品を拝見して、そんなに強い印象を受けなかったというのが正直な感じです。あの「びじゅチューン！」の中でも近代の美術作品を取り上げることが少ないんです。著作権が生きていて使えないことが多いんです。碌山に関しては切れているとのことですが。

私のなかに近代美術の積み重ねがあんまり無いなってことを見ていて実感しました。もうちょっと知らないといけないなというふうに思ったのが昨日の鑑賞した後の感想でしたね。だからご期待されてるようなことを言えなくて申し訳ないです。

濱田：井上さん今日はどうもありがとうございました。本日主催いたしました碌山美術館代表理事高野より、御礼のご挨拶を申し上げます。

高野：最初に忙しい方、遠方の方、お時間もありますので。

井上さんありがとうございました。また、ご来場の皆さんも本当にありがとうございました。いろいろ話をしようと思ったのですが、私は御来場の皆さんよりもはるかに井上さんのこと知りませんので、まとめることをやめにしました。ただ非常に良かったなと思うのは、最後に質問された碌山美術館に対する印象について、非常に率直なご感想を述べていただきました。これが現在の碌山美術館が置かれている現実だと、私も普段感じていることです。教科書からも消えてしまいました。七十代前後の年齢の方なら頭の中に碌山美術館もあるし、荻原守衛もいるんですが、若い人には「誰？」と言われるのが現実です。

そして今回の対談は未だかつてない企画でした。碌山と井上さんとを繋げるという私のなかでは全く繋がらない、その全く繋がらないことをやったことが、碌山美術館がこれから変わろうとしている姿なのかもしれません。

碌山は知らなくても、あそこの美術館面白いよ、楽しいことやってるよというふうに皆さんに思ってもらえることが私としては一番願っていることです。その幕開けを井上さんにやっていただきました。本当にありがたく思っております。重ねて御礼を申し上げます。

ありがとうございました。

井上：ありがとうございました。